JICA 教師研修 学習指導案・授業実践報告書

【実践者】

氏名	宮田千尋	学校名	埼玉県立上尾かしの木特別支援校
担当教科等	全教科	対象学年（人数）	中学部1～3年（14名）
実践年月日もしくは期間（時数）		2021年9月～12月（58時間：4 時間×15週）	

【実践概要】

1．実践する教科・領域：作業学習（農園芸班）

2．単元(活動)名：かしの木ファーム～人と人、人と野菜がつながる場所～

3．授業テーマ（タイトル）と単元目標

授業テーマ：「かしの木ファーム～人と人、人と野菜がつながる場所～」

単元目標

〇働くことに対する関心を高め、働くことに係る基礎的な知識や技能を身に付けるようにする。

〇将来の働くことに必要な事柄を見出して課題を設定し、解決策を考え、実践を評価・改善し、表現する力を養う。

〇よりよく働くために必要な事柄を、工夫し考えようとする実践的な態度を養う。

関連する学習指導要領上の目標

職業に係る見方・考え方を働かせ、作業や実習に関する実践的・体験的な学習活動を通して、よりよい生活の実現に向けて工夫する資質・能力を育成することを目指す。

4．単元の評価規準	①知識及び技能	種まきから収穫・販売までのおおまかな流れを知ることができる。
	②思考力、判断力、表現力等	作業における課題に気付き、それぞれに適した方法で解決に向けての行動を考えることができる。
	③学びに向かう力、人間性等	農園芸作業を通して達成感を味わい、楽しみながら作業に取り組むことができる。 自己の適性に合った役割を担い、他者と協力して取り組む態度を養うことができる。

5．単元設定の理由・単元の意義

（生徒観、教材観、指導観）

【単元設定の理由】

学習指導要領にある「教科を合わせた指導 作業学習」についての記述を元に設定している。作業学習は、作業活動を中心にしながら、生徒の働く意欲を培い、将来の職業生活や社会自立に必要な事柄を総合的に学習するものである。また、生徒に地域とのつながりを感じてほしいと願い、地域に開かれた学校づくりの観点から、地域の住民が参加でき、地域の専門家と協働して取り組める内容を設定した。

【単元の意義】

農作物を栽培、収穫、販売する作業活動を通して、喜びや達成感を感じるとともに自己肯定感を高めることができる。また、協働的に作業に取り組むことで、他者とのかかわりが増え、コミュニケーション能力や人間関係を形成する力を高めることができる。

【生徒観】

主に知的障害を有している中学部1～3年生、14名のグループである。口頭での指

	示理解ができる生徒から、日常生活の多くの場面で1対1の支援を要する生徒まで、実態差が大きい集団である。農園芸作業学習では前期に夏野菜づくりの学習を経験した。一つ一つの作業活動を積み重ね、野菜が収穫できた達成感を味わうことができた。また、現在は保護者向けの販売会に向けて、ある程度の見通しを持ち、期待感を持って作業活動に取り組めるようになっている。 【指導観】 　作業活動では「「わかる」こと「できる」ことを広げ、ひとりだちする力を育む。」の学校教育目標のもと、一人一人の実態に応じた「少し頑張れば、できる」作業内容を設定することを心掛けた。本校に通学している生徒たちは、卒業後も多くの人の支援を受けながら生きていく。「ひとりだち＝人と共に生きていくことができる」という視点を重要視し、多くの人とつながりをもつことができる内容も取り入れた。 　農作物を生産するという特性を生かし、地域の資源を活用して教育活動を充実させる取り組みを設定した。農業の専門家による技術指導、生産された野菜を加工し付加価値を生み出す、地域の公園の資源を活用し授業を充実させ、売上金は募金という形で地域へ還元するといった取り組みを計画することができた。生徒たちのアイデアや能力、協力先の豊富な知識、そして収穫体験に参加された学校内外の協力者の気づきや意見を掛け合わせ、さらにより良い教育活動に結び付けられる可能性を大いに感じている。

6．単元計画（全58時間：4時間×15週）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	農作物を育てよう。	作業活動を通して、職業観や社会自立のための総合的な力を高める。	・はじめの会、終わりの会 ・畑づくり、畑整備 ・農作物の育成 　種まき・植え付け・追肥・剪定・追肥・収穫・袋詰め・校内販売等 ・学校給食への野菜提供 ・給食調理後の残野菜を使ったコンポストづくり。 ・新聞紙を使用した紙袋づくり。	野菜の上手な育て方大事典（成美堂出版／北条雅章監修） SDGsのアイコンを取り入れた掲示物。
2 本時	保護者向け販売会（収穫体験型）をしよう。	育てた作物を販売し、達成感を感じることができる。	・グループ分け ・担当の野菜決め ・他作業班とのコラボレーション製品作り ・他授業班とのコラボポスター作り ・担当の野菜の生育、管理 ・掲示物（ポップ、畑の看板等）作成 ・販売会練習 ・保護者向け販売会	自作ポスター 注文票 販売表
3	パートナーシップで目標を達成しよう。	多くの人とのつながりを持つことができる。	・ふれあい交流体験 　学校内外の人を授業に招き、一緒に作業活動を行う。 ・銀杏拾い 　学校に隣接する平塚公園での銀杏拾い。売上金は募金する。 ・畑づくり	ポスター

			平塚公園から腐葉土を運び入れ、土づくりをする。 ・キムチづくり 地元業者「キムチショップあげお」様の協力を得てキムチづくりを行う。 ※教員向け ・農業指導 地元企業「ベジタブルボーイズカンパニー」様の協力で教員向けに農業指導をしていただく。	「キムチショップあげお」制作の動画、手順表

7. 本時の展開（33、34時間目）

本時のねらい：

・収穫体験の流れを知り、販売会への見通しを持つことができる。（知識及び技能）

・育てた野菜の販売を経験し、感じたことを他者に伝えたり、表現したりすることができる。（思考力・判断力・表現力等）

・育てた野菜が収穫・販売されることの達成感を味わい、意欲につなげることができる。（学びに向かう力・人間性等）

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動 ・指導形態	指導上の留意点 （支援）	資料（教材）
導入 （10分）	○集合、挨拶（11 月リーダー） 始まりの会 本時の内容確認	・リーダーに注目できるよう促す。 ・進行がスムーズになるよう、言葉かけやパネルで支援をする。	・挨拶用パネル
展開 （60分）	○前半作業開始 グループごとに野菜の確認、収穫・販売方法の確認。 ※各野菜の数を確認し、本時に収穫可能な種類を決定する。 休憩 ○後半作業開始 販売会練習 受付・会計 買い物客（4名） ○片づけ	・鎌や包丁等の道具は教員が管理をする。 ・収穫可能な数およびB級品の数を確認する。 ・受付担当グループは注文票を確認して、担当の野菜のグループに案内する。 ・収穫で刃物を使う場合には、買い物客に取ってもらうか、教員が代わりに取る。 ・注文票の野菜を取り終えたら、会計所へ案内する。	・一輪車 ・てみ ・鎌 ・ナイフ ・はさみ ・注文票 ・買い物袋
まとめ （15分）	○終わりの会 本時の振り返り、次回の予定 ○健康観察、挨拶、解散	・袋詰めは買い物客にしてもらう。 ・全員で片付けをする。	

8. 評価規準に基づく本時の評価方法

・収穫体験の流れを知り、販売会への見通しを持つことができたか。（観察、発言）

・育てた野菜の販売を経験し、感じたことを他者に伝えたり、表現したりすることができたか。（観察、発言） ・育てた野菜が収穫・販売されることの達成感を味わい、意欲につなげることができたか。（観察、発言）
9．学習方法及び外部との連携 ・ふれあい体験交流会 ・保護者向け作業販売会 ・地元企業「キムチショップあげお」と協力したキムチづくり ・地元企業「ベジタブルボーイズカンパニー」と協力した畑づくり ・平塚公園と協力した学習活動
10．学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組 学校内： 教員向け研修会「教師のためにSDGs研修参加報告会」を実施した。

【自己評価】

11．苦労した点	・「ふれあい交流体験」では、学校内の職員は計7名参加。JICAインターン学生が2名参加。残念ながら地域住民の参加は0名であった。特別支援学校に足を運んでもらえるような魅力を発信するアイデアを深める努力と普段からの地域住民とのつながりの強化が必要と感じた。 ・生徒一人一人の理解する力に実態差があり、SDGsという抽象的なテーマを具体的にイメージできるようにすることが難しい。これまで行ってきた作業学習の活動がSDGsにつながっていることに気が付くことから始め、SDGsについて自ら考えることができるようになる土台作りとしたい。
12．改善点	・学校内向けのふれあい交流体験の募集時期を変更。学校行事等が集中する時期を避けて計画を立てる。作物の育成計画の段階から、小学部からリクエストを募るなど、「一緒に参加しているワクワク感」を共有して、参加しやすくなるような期待感を高める。 ・学校外のふれあい交流への参加については、まだ学校とのつながりがない住民よりもすでにつながりのある住民の方に参加を促して実績を増やす。地域住民同士のつながりから本校への関心が広がっていくことを期待したい。
13．成果が出た点	・普段行っている作業学習の取り組みがSDGsの目標につながっていることに気付くことができた（給食への食材提供、給食調理後の野菜くずの肥料化等）。 ・保護者向け販売会に向けて、グループごとに担当する野菜を決めて、管理をした。販売会当日には、担当した野菜を育てる中でできるようになったことや苦労したことを保護者に伝えることができた生徒が多かった。 ・気持ちを込めて育てた野菜が次々に売れていき、購入客から称賛されると、達成感や充実感を感じることができた。さらに次の学習への意欲につなげることができた。 ・ふれあい交流体験のゲストが参加した際には、担当している野菜の紹介や自身が作った看板を積極的に説明するなど、普段よりコミュニケーション活動が活発になった。 ・ショップと協力したキムチづくりでは、コロナ感染症の影響で講師として招くことはできなかったが、キムチづくりの動画とタレを提供していただき、収獲した白菜がキムチに変わっていく過程を、体験することができた。

14. 学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）

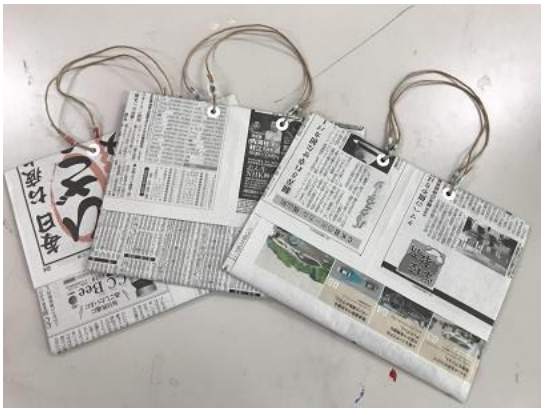
<地域に向けたポスター>

<地元のショップと協力したキムチ>

<畑の様子～野菜と手書きの看板>

<気持ちを込めて育てた白菜>

<給食調理後の野菜くずを肥料に>



<新聞紙を使用して作った買い物袋>

15. 授業者による自由記述	**SDGsへの気づき** 国内研修で得たSDGsの視点を生徒に伝えるには、どのように授業づくりをすればよいかがまず悩んだポイントだった。そこで、本グループの生徒の実態からできることを考えた。その結果、いきなり広い世界に視点を向けることよりも、自分の身の回りに目を向けてSDGsのレンズで物事を見ることから始めることにした。そこで、これまでの授業の取り組みを振り返ると、育てた野菜をその場で消費することは輸送コストカットや食品ロスの削減につながること、野菜くずの肥料化はごみを減らし環境への負荷を減らせることなど、SDGsにつながる活動をすでに行っていることに気が付くことができた。 **地域とのつながり** 目標の「4. 質の高い教育をみんなに」、「11. 住み続けられるまちづくりを」の観点から、地域の多くの人と特別支援学校の児童生徒がつながった取り組みを行いたいと考えた。この取り組みでは、本校生徒にとっては卒業後に地域で生きていくために必要な資質の向上をねらいとした。地域の方々には本校の生徒と触れ合うことで障害者理解や多様性のあり方について考えてもらうきっかけになってほしいと願っている。取り組みへの協力者からは依頼に伺った際に「今は（感染症の影響で）人のために何かをしたいと思っても、言い出せない時代になってしまった。協力できることがとても光栄に思う。」「知的障害がある生徒が、できる方法を一緒に考えたい」と、大変好意的なご意見をいただいた。この場をお借りして、ご協力をいただいた方々に感謝を申し上げます。今後は、まだ顕在化されていない地域の協力者とつながりを広げ、地域に開かれた学校づくりを進めながら、生徒たちのために持続可能な教育力を高めていきたい。

参考資料：

・JICA教員のためのSDGs研修 「持続可能な社会を読み解く多様なレンズ」 佐藤真久

・JICA教員のためのSDGs研修 「岩沼みんなの家」講義及び見学

※ 過去の本研修参加教員による実践事例と使用教材、ワークシートなどを JICA ホームページに掲載しています。　是非ご覧ください！

https://www.jica.go.jp/tokyo/enterprise/kaihatsu/kaigaikenshu/index.html